

学校法人海星女子学院

神戸海星女子学院中学校 3年

島並 玲

「来週までに、一セント硬貨を百枚持ってきてください。」

父の仕事の都合で米国ニューヨーク州の小さな街、ハリソンの公立学校に通っていた小学二年生の私は、ある日突然先生にそう伝えられた。その日から私は、家族の協力も得ながら、買い物のたびにお釣りをせっせと集めることになった。

翌週、ずっしりと重い百枚の硬貨を持って行くと、今度は小学校のトイレや階段を使用するたびに、毎回一セントを支払うようにと先生は仰った。学校の建物はすでに建てられているし、これまでは無料で使えた施設を利用するのになぜお金がかかるのか不思議に思ったが、一週間後にその疑問は解けた。「有料期間」を過ぎたあとで先生は、そのようにして集めたお金を通じて小学校が維持管理されているという説明をして下さった。アメリカではこうして、身近な例を通じて税に関する教育が行われていたのだ。

もちろん、日本でも税について学ぶ機会はある。しかし、小学校の低学年から、しかも実際に対価を支払うという形で、身をもって税の仕組みを知るというのは、今から振り返っても貴重な体験だと思う。ハリソンは、米国の中でも特に安全で住みやすい街で、その住民は公立学校も含めたコミュニティー全体に誇りを持っていた。自分たちの学校という意識が強いからこそ、それを支える税の仕組みを子供のうちから学ばせていたのだろう。

道路や公園はもちろん、学校も無料では建てられないし、それを維持するには費用がかかる。もっとも、誰もが利用できる公共施設が税金で支えられていることは分かるが、いま実際に通っている生徒こそが恩恵を受けている学校に対して、一般の住民が広く納めた税が使われているのはなぜだろう。それはおそらく、教育は生徒や学生のためだけにあるのではなく、知識や技能を修得することを通じて将来の社会に役立つ人材を育てるものなので、その費用は社会全体で負担するのが望ましいからだろう。

これは、公立学校だけに当てはまる話ではない。私は現在、私立中学校に通っているので、両親が授業料を納めているが、インターネットで調べてみると、なんと私立中学校の収入の約三分の一が税金によるものだという。また、さらに義務教育を越えた高校や大学についても、税金は投入されている。私は、私立中学校に通いながらも、知らず知らずのうちに税金の恩恵を受けていたこと、そしてこれから社会人になるまでそれが続くことを知り、税金のありがたさに改めて気がついた。

私は、いまの学校生活を支えてくれている社会に感謝しつつ、未来の子供たちがより良い教育を受けられるように、将来はきちんと税金を納めていきたいと考えている。